

法政大学学術機関リポジトリ  
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

## ドストエフスキーと意識(3) キリーロフ(3)

著者	近田 友一
出版者	法政大学教養部
雑誌名	法政大学教養部紀要．外国語学・外国文学編
巻	103
ページ	103-126
発行年	1998-02
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10114/3704">http://hdl.handle.net/10114/3704</a>

## ドストエフスキーと意識 Ⅲ

— キリーロフ Ⅲ —

近 田 友 一

## Ⅰ

創作ノートを見るとアレクセイ・キリーロフは、「公爵」——スタヴローギンのように紆余曲折を経て決定稿に定着された人物ではない。ドストエフスキー作品の主人公たちはみな綿密なノートでの検討段階を経て決定稿に姿を現わすが、キリーロフだけは例外である。

キリーロフは第三ノート「一八七〇年九月十二日 大構想」に「技師」として初めて名前が記される。

技師は檄文を持って来て、フェージカその他の人々とともに南の方の工場にばらまく。ネチャエフの実行者はこう考えている——もし知れたら、俺一人が捕まればいいんだ。俺は紙の上で自白してピストル自殺する。なぜなら、俺にとってそれは同じことだからだ。(傍点ドストエフスキー) (『悪霊』創作ノート手帖第三)<sup>(1)</sup>

彼はネチャエフに仕立てられる「犯人」として——「自殺者」としての役割を振り当てられているにすぎない。

「ピストル自殺」「同じこと」という表現はその後重要な意味をもってくるのだが、この時点では作者はそんなことは夢想だにしていない。「技師」はあくまで端役であり、ネチャーエフのための道具立なのだ——彼は「共同の事業のために自殺する」と申し出る。ドストエフスキーはイタリック体で「最も必要なこと——技師の役割は実際的」とまで書いている。

単なるアナキーな、ファナティックな人物がその独自の自殺哲学のために大きく変貌する。キリーロフの成長は、彼に「人神」を実験した師スタヴローギンにも意外だったし、ドストエフスキーにとっても思いがけなかったことであろう。ドストエフスキー作品におけるキリーロフのユニークさは前人も後人もたない。彼だけが屹立している所以はその生成の過程にあり、それが「小説」というもののものも面白さなのかもしれない。

## II

キリーロフは「先駆者」をもたないが、その思考の道筋のうえでは、IPPOLITOと最もつながっている。両者ともその思念は「自然律」をめぐる展開される。

あのイエスでさえ克服できなかった「自然律」が、一切に優先するとすれば、人間は他律の世界を生きてゆかない。この他律の「世界」に放りこまれたことを意識した時から人間の苦悩は始まる。何一つ選択することも出来ず、すべて無明であるということだけ意識する能力は与えられているということがどういふことか——IPPOLITOは直截に問題を提出している。

ここにはドストエフスキーの後期のモチーフが凝縮している。十七歳のフォードルの漠然とした思いが蘇り、明確な形をとってきたと言ってもよい。「人間は宇宙の孤児」「背理の子」と兄ミハイルあての手紙で表現した時、ドストエフスキーは彼の「永遠の根底」に触れていたのである。それが今、紛れもない形で、作家の前に立ちあらわれてきたのだ。もはや誤魔化すことも通れることもできない。IPPOLITOの問はそういう姿をしている。

イッポリートの間は多岐にわたるが、集約すると、「死後冷たい地殻の中に埋もれ、地球の自転とともに何の意味もなく巡っているだけだとしたら、なぜこれほどの高度の意識を人間にあたえる必要があったのか」ということと、「ひとたび『我在り』と意識した以上は、『在らしめた』意味について絶対者に回答を求める」ということの二つであろう。

イッポリートは「意識」にこだわる。他の万有と異なる人間存在だけの苦悩の根源は、すべて意識にある。空間的には自分の置かれている位置を認識し、時間的には生の長さを自覚せざるを得ないという「事態」は、そのまま「黙認」し、是認出来ることではない。

意識はイッポリートの全存在に先行し、存在自体を規定する——彼の存在全体が意識である。余命二、三週間のイッポリートには、すでに存在はなく、純粋な意識だけがある。

回答不能の間だけが、確実に存在する。彼を追い込んでいるのは、彼自身であることをイッポリートは熟知している。しかし、彼はこの間を取り下げるつもりはない。「意識」の意味を問いつづけることが、彼の存在の意味そのものだからだ。

イッポリートに今、確実にわかっていることは、二、三週間後に自分は「自然律」に従うということだ——自分に認識不能な「宇宙のなんらかのプラス・マイナスのために」この世界から消去されるということである。この理不尽な刑の執行に、他ならぬ「自分」だけが選ばれ、それを待つ「時間」に耐えなければならぬのだろうか——人間はつねに「被選別者」として存在し、そのことを四六時中自覚しつづけなければならない……

イッポリートの間の根底には、恐怖から変質した憤りがあり、人間の存在の形への、得心出来ない不快感がある。彼の生は、この不快の意識を一瞬一刻毎に噛みしめることに他ならない。

意識が対象の影響を受けるとすれば、それはどういふことなのか。自分の意識が対象の反映ならば、まだ救われる余地はあろう。イッポリートの対象が無言の絶対者であるかぎり、イッポリートの意識はただそのまま突き返され、自己の中で渦を巻くだけである。それは相対的な意識になり得ない絶対的意識である。彼はその意識の中に沈

潜し、イッポリート自身が余命二、三週間の「意識」となる。彼の意識の純粋性はその限られた時間にある。

人間存在が訳もなく他律の世界に放り込まれたことと、「意味」をもとめる宿痾におかされた厄介な存在だということの背理は、おそらく絶対者が想定した以上に大きいのである。イッポリートの出現は、作者自身にもあらためてこの事実をつきつけたことになる。

意識をもたないものが宇宙の「調和」に何の不自然もなく参加し、意識をもつ者がその参加を拒まれるとしたら、「調和」とは一体何なのか。ドストエフスキーはここで十七歳の原点に還る——兄ミハイルに出した手紙の重さを作者は三十年の歳月を経て再認することとなったと言えよう。

「調和」とは人間の「存在の意味」である。人間存在が宇宙のなかに定位置をもたないとしたら、流浪者に絶対者は不要であろう。また絶対者が不在ならば、本来「調和」そのものが存在しないし、イッポリートの表現に従えば、「世界は悪魔の寄席芸」なのである。

無意味な存在である人間を意味づけようとする——開闢以来、人類の英知も信仰もこの一点に集中されてきたのかも知れないと考えることは辛いことだ。ドストエフスキーは十八歳の「少年」の死際のわがままさに賭けたのであろうか。たとえイッポリートの間に節度がないとしても、熟年の作家はそこまで滑り落ちざるを得なかったのである。

### Ⅲ

イッポリートの「自然律」の問題はキリーロフにつながっていく……いま、結果から観るとそうみえるが、ドストエフスキーの創作の過程ではそれ程単純なものではない。

既述のように、当初キリーロフはそんな意味で構想された人物では全くない。キリーロフはいわば、端役からい

きなり主役に拔擢されたようなもので、ドストエフスキー・ドラマでは希有のことに属する。

「技師」をネチャーエフの計画の実践者——ピラ撒きとして図式的に『悪霊』のプラン（シジュエット）に組み込んだ時、作家の頭にあったのは、シャートフ殺しの冤罪を負って自殺する神経症的な青年としてである。ネチャーエフのために自殺を志願する動機がユニークであったために、作者の構想を超えて、その思想だけが思いもかけず一人歩きしていったのであろう。

七一年三月一日のノートにネチャーエフと公爵（スタヴローギン）のこんな会話が記されている。

ネチャーエフは公爵と技師のことを話す。「彼の思想は、社会成立の支えになっている礎をそこから引き抜いてしまわない限り社会変革のあらゆる試みは徒勞に終わるだろうという点にあるのです。彼はこの礎が神であり、神への信仰だと考えているのです。

誤りは神にのみあるという彼の考えが正しいかどうかはわかりません。そのことを考えてみる時間がなかったのは残念ですが、しかし、彼の思想はなかなか力強いですよ。世界のすべての社会が神を信じていたから、神を信じることをやめてしまったら、すべての社会は変わるだろうと考える根拠はあります。人間は肉体的にさえ変わるだろうと彼は言います。ここには思想があるでしょ。……ね？」

公爵「いや、それは大きな思想とさえ言えるな。彼の論証を引っくり返して見給え。神を失うと人間が肉体的にさえ変わるものだとしたら、こうも言えるわけじゃないか——肉体的に変化することなしに人間は神への信仰を失うこともない」と<sup>22</sup>

「神」が人間の営為の根底にあることを認めている点では両者とも共通しているが、二人の思いは全く異なる。ネチャーエフが「神」の觀念を崩すことによって社会変革を夢想しているのに対して、スタヴローギンは「人間の肉体的変化」に関心をいだく。技師の神への姿勢が単純な否定ではないことにスタヴローギンは気がついている。

それは神の方の問題ではなく、人間存在の在り方のそれ——存在の変革の問題なのである。人間が今の在り方をつづけている限り、神を否定することは出来ない。神を拒否しながら人間がこれまでのままで居ようとすることは自己矛盾であり、虫のいい考え方なのだ。

これまでよかれあしかれ「神」と「人」はセットとして考えられてきた。その枠組を根本から崩そうというのである……神の世界の「調和」の中に人間が容れられないならば、人は別の道を見出さなければならない。技師の発想は「大きな思想」に発展する胚種を秘めている。公爵はそれを認めた。このノートの書込はこれだけの意味を含んでいる。

ドストエフスキーが最初「技師」を着想した時、それは自殺願望の変人を設定しただけであり、シャートフ殺しの「犯人」として適任と考えていた以上のものではなかったであろう——初期のプロットでは彼はシャートフ、ネチャーエフとの関わりにおいてのみ役を与えられていたにすぎない。「肉体的変化」という発想が「技師」を「キリーロフ」にまで発展させていくのである。これは作家も予期しなかった筈である。初期の構想は放置されたまま、技師の発想の核である「肉体的変化」の周辺の想念だけが作者の深部で、ノートには書かれることなく自己増殖していくことになる……

#### IV

『悪霊』のノートはほぼ一年以上中断の後七二年の六月末から書きつがれている。すでに「キリーロフ」の名前は定着しているが、決定稿に見合うような文章は、相変わらず見当たらない。「自殺」のモチーフは書かれているが、表面的で必然性に乏しい。むしろキリーロフは一介のテロリストとして描かれ、ユニークな自殺論からは後退してしまっている。

作家はキリーロフの端役としての構想を捨てきれないまま小説を進めようとしていたのであろうか。キリーロフ

と形而上的なものとを結びつける機縁を見出せずに迷走しているようにさえみえる。

キリーロフには、真理のためには今すぐにも自分を犠牲にするという民衆的な思想がある。四月四日の不幸な盲目的な自殺者（皇帝暗殺未遂者カラコゾフ）でさえ同時に自分の真実を信じていた……

真理のために自己と一切を犠牲にすること——これはこの世代の民族的特質である。神よ、この世代に祝福を与え、彼らに真理を理解せしめ給え。何故なら問題のすべては何を真理と見做すかにあるからだ。そのためにもこの小説も書かれたのだ。（七二年十一月二十四日<sup>3</sup>）

これはすでにノートの終わり近くの部分だが、ここでもまだキリーロフの方向性は定まっていない。「真理のために自己を犠牲にする」と書いた時、ドストエフスキーは何を考えていたのだろうか。「何を真理と見做すか」が判然としない時に他ならぬその「真理のために」自分を捧げるといふのは、かなり難しいことだ。ドストエフスキーがこのように曖昧なことを記すことは珍しい。

『悪霊』がドストエフスキーの『父と子』であることは明らかだが、ノートの段階ではキリーロフにまで世代の特徴をみようとしていたことは、かなり興味を惹く。ただ小説の作法としての観点からみると、キリーロフのこのとらえ方で、キリーロフという人物の性格づけが混乱したことは否めまい。

このことは「キリーロフ」について作者が迷いつづけていた証左である。キリーロフの自殺と「人神」との連関は、ノートにはヒントすら書きとめられてはいない。「決定稿のキリーロフ」がノートに現われたことは一度もないのである。キリーロフの自殺が「民衆のための死」から「人類のための死」に昇華するのは、作品のプロセスの中なので、キリーロフは『悪霊』の進捗の過程で、作品とともに成長していった人物なのであろう。

結局ノートをみると、キリーロフに関しては「肉体的変化」と「自殺」だけがキイ・ワードとして当初からあったもののように思われる。決定稿の段階で、「人神論」はこの二つを繋ぐアイデアとしてドストエフスキーの脳裏に



閃き、深化していったのではないだろうか。

小説の作者としてドストエフスキーが最も腐心したのは、キリーロフの自殺の動機づけであろう。具体的現実的に一見みえながらきわめて抽象的な「民衆のための死」は、説得力をもたない。「人神」はその意外性、荒唐無稽さで、かえって読者を惹きつけるのではないか——ドストエフスキー自身がこの思いつきにまず飛びついたのかも知れない。ノートを繰り返し読んでみても、スタヴローギンに「人神論」が最初からあったようにはどうしても思えないのである。

たとえ偶発的であれ、「人神」の観念を得てからのキリーロフは大きく変貌する。作者もキリーロフ同様この途轍もない観念が気に入る。ドストエフスキーの深部では、秘かにイッポリートの鉦脈とキリーロフが触れる……孤絶して先行者をもたないはずのキリーロフがイッポリートの中絶したままの間をもう一度取り上げるのである。

## V

ドストエフスキーが「人神」の観念を「神人」から得ているであろうことは、想像に難くない。「神人」イエスは、ドストエフスキーが最も愛着をいだく「人類最高の人間」であり、彼の受難は作家の価値観を決定している。ドストエフスキーの生死を分ける一点はこの神人もまた「自然律」に従うかどうかということである。「地球全体にも匹敵する価値をもった」イエスすら「無知で暗愚な力」——自然律に従わせられるとすれば、人間の有史以来の存在形態は根底から変わらざるを得ない。人間にとって「神と人」とのセットの信頼関係は失われ、「調和」も必要ではないのである……

要は人間がそういう自覚をもつかどうかだ。ドストエフスキーはキリーロフをイッポリートに繋ぐことによって新たな問を読者に提出する。

イッポリートは自分が生かされて「在る」ことに我慢がならない——或いは、「生かされて在る」という意識を

持つことに憤りを覚える。自分の生の主人は自分であり、誰の指図も受けたくはない。自分が自分であるためには、自分の絶対的な意識の中に自分の存在もなければならぬ。

「調和」ということは、絶対者の意志が自分の意識に透入することであり、それならそれはそれでよい。しかし、「調和」からも拒まれ、自分は自分であるという絶対的な意識ももてないとしたら、自己の存在を是認する根拠は何処にあるのだろうか。イッポリートは「我在り」という意識をもてあます。方向性を喪失し、彼自身の中で渦を巻いているのがイッポリートの意識である。

イッポリートは生の意味を求め、死の意味を求める。ただこの世界に偶発的に「在る」ことは存在ではない。彼は自然律にただ従うためにだけこの世に現われたのではない。そんな自然律の存在を証明して何になろう。「自然律」と「調和」は本来全く対蹠的位置に立つものである筈なのに、何か訳のわからぬ「宇宙のプラス・マイナス」のために自分の生が奪われようとしている。絶対者の存在を証明する筈の「調和」が結局は「自然律」の下に立つのであれば、「調和」の理念は矮小化し、価値を失う。これでは「調和」に加わろうが加わるまいが同じではないか。

イッポリートは「調和」につながる意味ある「自然律」を求める。そういう形で自己の死を得心したいと思う。彼の言い草に従えば「どうしたら一番いい死に方が出来るか」ということである。イッポリートの意識はこの一点に収斂していく。

愚鈍な他人どもを残して自分だけが、むざむざ「自然律」の餌食になることは、彼の矜持が許さない。イッポリートはこの忿懣を、彼とは一番遠い距離にいそうに見えて、また最も彼の言い分を理解してくれそうなムシュキン公爵にぶつける。

「いや、一つ教えてくれませんか。どうしたら一番いい死に方ができるでしょうか？……つまり、高尚な死に方がね。教えて下さい！」

「われわれの傍を通りぬけて下さい。そしてわれわれの幸福を許して下さい」

「ははは——ぼくもそうだろうと思った！ きっとそんなふうな言葉が出てくるだろうと思ってた！ しかし、あなたがたは……そのお口のお上手な人たちですねえ」（『白痴』第四編五）

公爵はIPPポリートに慰めは言わない。それはIPPポリートに一層屈辱感を与えるだけであることをムシュキンを知っている。去るべき者と残るべき者が截然と分かれるのは自然の摂理であることを人は承知しなければならぬ——と公爵は信じている。だがムシュキンはそれを、「許して下さい」という言葉で表現する。IPPポリートが公爵に期待していたのは、優しさの駄目押しだったのだろうか。このやりとりは、何気なくみえておそろしく緊迫している。生命を間に挟んでの問答だからであろう。IPPポリートは冗談めかして必死に答える——「ぼくもそうだろうと思っていた」と。

「一番いい死に方」を希求したIPPポリートはこれでその誇りを守ったのであろうか。絶対者不在で「自然律」だけであるとしたら？——IPPポリートは現実はそうであろうと思っている。しかし、彼は「絶対者」と「世界の意味」の存在に執着する。その想念は死を目前にして、論理を超えてなお一層切実になる。

二人の会話には、去る者と残る者との必死の鏖闘り合いがある。公爵は残る者の時間もたいしたことはないと考え、IPPポリートはその「時間」も許せないと思う。マイエルの家の壁を憎んだように、IPPポリートは残る者への憎悪の中に「余生」の存在価値を見出す。

IPPポリートの残された短い生を支えているのは、「自然律」と「生き残る者」に対する憎しみである。IPPポリートは観念ではなく、感覚として——彼の身体全部で「今ここに在る」ことを一刻一刻感じている。作者自身が刑場でみつめていた「金色の光」の「時間」とここでは重なっている……瞬時にして自分の「存在」をかき消す「自然律」があり、無意味に「生き残る者」どもがいる。「何か訳のわからぬ宇宙のプラス・マイナス」とは何なのか？「残された五分钟」でIPPポリートはこの「謎」を解こうとする。

今、この瞬間に終わるかもしれない短い生の中で難解な問の前に立たされつづけている自分を、後に残る者どもは——公爵は別として——気晴らしの劇でもみるようにみている。IPPボリートの「告白」は、演者自らが「観客」の期待に応じて自分のドラマを仕上げようとした試みである。そこには彼の途方もない矜持と挑戦がある。

死に対する意識が人間を変えんとすれば、それはプラスの方へなのか、マイナスの側へなのか。IPPボリートは、「持ち時間」に余裕のある者には不可能な「際」にまで追い込まれて設定されている。これはドストエフスキーの他の主人公たちにはないことである。

作家はIPPボリートで極限まで行った。意識が変化しない限り人間存在の「在り方」もまた変わらないであろう。ドストエフスキーはIPPボリートをかくことによって、また新しい「存在」の地平を拓こうとしている。

## VI

キリーロフはIPPボリートのように死を目前にしているわけではない。ただ彼は自分の方から死を自分の前に引き寄せている。

IPPボリートは絶対者が存在することをねがい、「調和」に希みを繋ぐ。IPPボリートにとって「調和」は、生きるためにも死ぬためにも不可欠の条件なのである。

キリーロフには、「死」と「調和」がIPPボリートのごとくリンクしているわけではない。彼にはこの二つは切り離されている。IPPボリートのいう「調和」はキリーロフにはあまり関心がない。彼は「死」のみを分離して、いわば一種の「抽象物」のように「培養」しようとしている。IPPボリートに死との格闘者の悲愴さがあれば、キリーロフには実験者の冷徹さがある。IPPボリートのような死との「一体感」は、キリーロフには無縁のものである。彼はあくまで「死」を対象物として観ようとする。

キリーロフは「死」を頭上にロープでぶら下げられた「大石」だと観じる。この「大石」は人が自分の存在を意

識した瞬間から在り、人間が在る限り、「大石」もまた在る。人間の存在は終生その「大石」から「はみ出る」とは出来ない。その石は融通無碍であり、人が通れ得たつもりでも、どこまでも追いかけてくる。人間の頭があるかぎり、石もまたその頭上にある。

人間に絶対的自由がないということは、当然でありながら改めてつきつけられてみると最大の不快事であり、人間存在の形を容赦なく規定していることにキリーロフは気づく。このままでいけば、最初から必敗のカードで絶対者と勝負するようなものだというのがキリーロフの認識であろう。彼は「死」のカードを裏返して使おうとする。「大石」——死そのものには痛みはないが、吊り下げられた「大石」に対する恐怖には痛みがある。問題は「大石」に対する「恐怖」なのだというのが彼の認識の出発点である。キリーロフはそこに、これまで人間を有無を言わず従えてきた絶対者の「詐術」を見抜こうとする……

キリーロフは話し手の「わたし」——G（アントン・ラヴレンチヴィッチ）との対話をとうして彼の着想を明らかにしようとしているが、これはノートの段階では全く発想されず、決定稿で初めてつめられたものである。

「いいですか」と彼はわたしの前に立ちどまった。「かりに大きな家ほどもある大石を想像してごらんさい。それが宙にぶら下がって、あなたがその下にいるんです。ところで、もしそれがあなたの頭の上に落ちてきたら——痛いでしょうか？」

「家ぐらいの石ですか？ 勿論、恐ろしいですよ」

「ぼくは恐ろしいかどうか聞いているんじゃない。痛いでしょうかと言ってるんです」

「山のような石ですね、百万ブードもある？ 無論、少しも痛かありませんよ」

「ところが、実際その下に立って見たらそれがぶら下がっている間じゅう、あなたはさぞ痛いだろうと思っ  
て大変恐れるに違いない。どんな一流の学者だって、一流の医者だってみんな誰だって恐れるに違いない。誰でも痛くないと承知しながら誰でも痛いだろうと思って非常に恐れるに相違ない」『悪霊』第一編第三章

の八<sup>五</sup>)

キリーロフは人間が死を恐れる理由の第一は恐怖であり、第二は「来世」だと言っている。「来世」のフレーズはこの後すぐ続くがGの執拗な質問にもかかわらず、特に説明していない。ただ機械的に「来世です」と繰り返すだけである。全く未知であるに違いない「来世」への限らない不安と盲目的な怖れを言っているだけなのであるうか。とまれキリーロフは「死」そのものよりも「死」にともなう数々の事象の方が人間を死の陥穽に陥れることを指摘している。この批評はかなり厳しい。

最初から人間を死の枠のなかに閉うことに造物主の企みがあるとすれば、そこから少しでも「脱出」しないかぎり、この後も人間はこれまでの存在形式を踏襲して、退屈な歴史を反復するだけだろう。キリーロフは、人間の意識が根底に死への怯えをもつ意識——死の意識であることに、それに収斂されることに苛立ちをおぼえる。

キリーロフの発想は、一度「存在」の外へ出てみて、それを逆方向から眺め返そうとするところに特徴がある。「人神」はこの視点の延長線上にある。それは「大石」を頭上にいただきつづける上下の関係から人間を解き放ち、横に並ぶ関係に新しく変えて行くことになる。絶対者が持ちつづけていた「大石」を人間の手にしたこうとするのが彼の魂胆であろう。「人神」が荒唐無稽な観念であることを最も知っているのはキリーロフ自身である。しかし、彼はあえてそれを持ち出す——人間のこれまでの存在形式を覆すものならなんでもよいのだ。「神人」が頼りにならなければ「人神」というのがキリーロフの真剣な洒落である。

「神と人」とのセットのなかで、これまで情性で生きてきた人間存在には何よりも衝撃が必要なのだとキリーロフは考える。絶対者を否定しながらなお曖昧な幻想をいだこうとする人間にキリーロフは業を煮やす。「神の撲滅」は人類の終点でもあり、起点でもある。人間はこの「転回点」の意味をもっと真摯に考えなければならぬ。時間が勝手に流れて歴史が形作られたわけではない。他人事として人類史を無責任に眺めていることは最早許されない地点に来ているというのがキリーロフの認識である。

「神はない、しかし神はある。石の中に苦痛はない。しかし石に対する恐怖には苦痛がある。苦痛と恐怖を征服した者はみずから神となるのです。その時には新生活が始まる。その時には新人が生まれる。一切が新しいものになる……その時こそ歴史は二つの部分に分けられるようになる——ゴリラから神の撲滅までと、神の撲滅から……」

「ゴリラまで？」

「地球と人類の物理的変化まで。人間が神になると、肉体的にも変化します。そして世界も変化し、事物も変化します」(同前)

「ゴリラから神の撲滅まで」辿った長い時間を、人類は同じようにまた新しく歩もうとしているのであろうか。それは絶対者不在、不要の時代の始まりであり、孤立した人間存在だけの時間になる。キリーロフは敢えてその「孤立」を選ぼうとする。神に隷属し、絶対者の枠の中で生かされているのは本当の存在ではない。どこまで行っても「大石」に束縛されている生は真の人間の「存在」ではないとキリーロフは確信する。

イッポリートは「調和」に憧れ、無縁のはぐれ者になることを怖れたが、キリーロフはその「孤立」こそ人間の証明だと考える。人間存在の位置をめぐって二人の想念は逆接関係を描く。

一切の援助者を持たず、孤立しつづけること——キリーロフはそこに人間存在の絶対条件を認めた。「人神」はその孤立の象徴である。他律者が自律者になれば、それは神にも等しい。絶対の自由を獲得すれば、その時点で人間は神になる……

孤立に耐え続けているうちに人間は、その支援者を——精神の支えを必要としなくなるであろう。人間が精神的に変化することが肉体的変化につながっていく。人間の存在の条件が変われば肉体も長い年月の間には徐々に変化してくるに違いない——キリーロフの「予言」はそのことを想定している。

「予言」そのものにあまり意味はないが、これまでの人間の「神との関係」は絶対に変えなければならぬというキリーロフの姿勢には意味があろう。「神と人」との馴合ともみえるセットの中で、人間が神を受容していた「平和な」時代は終わったのである。人間が本来の存在形式を獲得するためには、この事実を凝視し、十全に認識する必要がある——キリーロフの「予言」はただこのことを語っている。

## VII

キリーロフの言葉は一見奇矯にみえてその真意は意外に常識的である。突飛な発想と解釈するのは、彼一流の「表現」に読者が惑わされているからである。

人が神にならなければならない必然性がキリーロフの論理にはある。ただ、その論理は「心情的」であり、それを論理と認めるかどうかが解釈を分ける。

キリーロフのパセチックな表白は間々行き過ぎる。論理が飛躍しているようにみえるのもこのためである。論理が明白であればあるほどそれは冗談に映るが、キリーロフは彼なりに筋道は通している……

ただ、自殺の動機づけだけは彼独特の発想である。流石の作者もここでは、おとなしくキリーロフに従っている。

「最高の自由を望む者は誰でも自殺する勇氣を持つべきなのです。自殺する勇氣をもつ者は欺瞞の秘密に気がついたので。それ以上に自由はありません。ここにすべてがありますが、その先には何もありません。自殺する勇氣をもつ者が神です。神も存在しなくなり、何ものもなくなる——というふうに、今は誰でもしようと思えば出来るのに誰一人としてやった者はいない」

「自殺者は何百万人といましたよ」

「しかし、みんなそのためじゃない。みな恐怖をいだいて自殺するんで、そのためじゃありませんよ。決して



恐怖を殺すためじゃない。ただただ恐怖を殺すために自殺する者だけがその場で神になるのです」(同前)<sup>7)</sup>

死の本質は恐怖にあり、人間の存在を規定しているのは、死自体よりも死に対する恐怖の「観念」である——「大石」は頭上に吊り下げられているから恐ろしい。人間の存在は結局この「吊り下げられている」ことに規定されているにすぎないのではないか。キリーロフはそこに我慢のならない不愉快さを見出す。

それは綱が切れる瞬間を予測出来ない恐怖であり、綱が切れるまでの連続する緊張の時間——そしてその後につづくであろう未知の闇に対する限らない不安である。キリーロフはこの人間につきまといっている「怯え」を克服しない限り人間が新しい存在形式を獲得する可能性はないと確信する。人間の生の意識は死の意識によって支えられているという「背理」は人間存在に不可避の矛盾である。それは絶対者が人間に与えた「宿命」であり、許しがたい。「詐術」なのだ。キリーロフはこの人間存在を束縛しつづけた「畏」を最初に見破った者だと自負している。

それを初めて見破った者は「見破った」ことを証明する必要がある、義務——「使命」がある。死に恐怖の存在しないことを——その恐怖が本来ナンセンスなことを、自殺によって証明するというのがキリーロフの論理である。

論理的には自殺すれば、「人神」は消滅するわけだが、その辺は分明ではない。少なくともキリーロフ イコール 人神とは書かれていない。死の秘密を知り、それを逆手にとって死を超えることを人類が悟った時、人神が「出現」する——という論旨は、人神は別にあり、キリーロフはその先駆者であるということなのであろうか。

「人神」という表現は印象的だが、キリーロフの言葉を辿っていくと、内容にはそれほど意味はない。力点はあくまで「死」を無力化しようとするつよい意識にある。「死」さえ克服すれば、人間は「最高の自由」を獲得し、その存在は絶対的な意味を持つのである。「死」に先回りすることは——未知であるが故に恐ろしいが、その本質は意外に平凡であるかも知れないではないか。

それが人間の意識全体を支配し、人間存在の形を始めから最後まで規定しているとしたら、そしてそれに人間が

これまで何の抗議の声もあげて来なかったとしたら、奇態な話だとキリーロフは考える……その時、おそらくキリーロフは人間存在の極北の形を感じていたのである。

## Ⅷ

周知のように作者は第二編第一章で、灯明をあげるキリーロフをスタヴローギンがからかう場面を描いている。確かにキリーロフの「信心」と生活愛は、「自殺論」と整合しない。キリーロフ自身は「生活は生活、あれは亦あれです」と答えて気にも留めていないが、キリーロフのこの心の「段差」はかなり厄介である。また、かえってこの辺が作家がキリーロフに惹かれ、書き込んだ理由なのかわからないし、小説の面白さでもある。

キリーロフの信心は彼のイエスに対する態度と無縁ではなからう。それも自殺直面にキリーロフのイエスへの思いを置いたことには作者の深謀を感じる……

キリーロフは人生最後の行為を目前にして「席をともした最後の人間」ピョートルに敢えてイエス観を吐露する。

かつてこの地上に一つの日があった。そして地球の真ん中に三つの十字架が立っていた。十字架の上にあった一人は、きわめて深い信仰を有していたので、いま一人の者に向かって「お前は今日わしと一緒に天国に赴くだろう」と言った。やがてその日は終わって二人とも死んでしまった。そしてともに旅路についたけれど、天国も復活も発見できなかった。予言は的中しなかった。いいか、この人は全地球における最高の人で、地球の生活の目的になっていたのだ。その上にある一切のものを含めてこの一個の遊星全体もこの人がいなかったら、ただの狂乱にすぎない。この人の前にも後にもこれほどの人は決していなかったし、また絶対に現われなだらう。それは実際、奇跡と言ってもいい位だ。こういう人はこれまでにいかなかったし、今後も決して現

われないだろうというところに奇跡が含まれているわけなのだ。もしそうだとすれば、自然律がこの人をも容赦しないで——その奇跡すら容赦しないで、彼をして偽りの中に生き、偽りのために死なしめたとすれば、当然この遊星全体が虚偽で、虚偽と愚かしい嘲笑の上に存在しているわけなのだ。してみると、この遊星の法則そのものが虚偽なのだ。悪魔の喜劇なのだ。一体何のために生きるのだ。もし君が人間なら答えてみる。(『悪霊』第三編第六章の二)

ピョートルは勿論キリーロフの言うところを理解しない。彼は一刻も早くキリーロフの死体がほしいだけである。最悪の聞き手を前にしてもキリーロフには、それでもなお最後に吐露しておきたい想いがあった。

イエスへの紛れもない敬慕の念は、先行者イッポリートと重なる。ただイッポリートはそこから復活——永生のテーマに入っていくが、キリーロフは永生の問題には関心がない。彼はあくまで「自然律」にこだわりの「自然律」に支配される世界と人間存在を否定する。

「自然律」は「一切を盲目的に呑み込む暗愚な巨大な機械」であり、それは人間を包み込むアガペの世界ではない。パラドキシカルに言えば、キリーロフは「自然律」の世界を憎むが故に信仰心を持つ。

彼は「自然律」の世界を否定するために自殺しようとしている。「大石」の下での存在の形には人間は別れを告げるべきなのだ。しかし、過去の人間存在の形を拒否するということがそのまま、これまでの人間の生活をも否定するということではなからう。いかなる思想をいだこうが、生活は生活として厳然としてある。怜悯なスタヴローギンには、それは論理的矛盾とも詭弁とも映るが、キリーロフは一向に意に介さない——「あれはあれ、これはこれ」なのである。たとえば、イエスのために灯明をあげても、それは「人神論」とは全く次元の違う話なのである。かつての師スタヴローギンが大きく成長した弟子の前に困惑した表情を見せるのは、キリーロフのこの「自然体」を理解しかねるからであらう。

キリーロフという人物全体の振幅は意想外に大きいし、多層的である——スタヴローギンはそれに戸惑っている。

皇子スタヴローギンの総括出来ないような事象などこの世にない筈なのにキリーロフにはてこずっている。論理のスタヴローギンと超論理のキリーロフと……『悪霊』の面白さの由ってきたところもここに一半があるのではなからうか。

キリーロフは「生活」を愛している。その生活には、イエスも、女の子も、彼女と遊ぶ鞠も、木の葉も入っている。彼が生活に「熱中」している時は「あのこと」はキリーロフの眼中にはない。「人神」は彼の脳裏から消えている——或いは片方に「人神」の錘があつて「生活」と釣合をとっているのかも知れないが今それは彼の関心にはない。

「生活はある。しかし死というものはまるでありやしない」と彼は言う。「あのこと」を考え、決意することによってキリーロフは死の意識を超え、新しい存在の形を得た。生活への没頭はその上に立っている。彼は今、「大石」から外れたところで自分の存在を自覚し、その形を眺め返している。

「すべてよし」ということを教える人はこの世界を完成する人です」とキリーロフは言う。「その神人は隣にされた」——スタヴローギンの茶々に耳も貸さずキリーロフはそれは「人神」だと断言する。

キリーロフの気持のなかでは、ある時点では確かに「神人」と「人神」が重なっている。「すべてよし」はその共通項である。キリーロフの「神人」への共感、彼の新しい人間存在の形を志向する意識のなかで「人神」として再生される。

キリーロフのうちに「人神」の観念は揺れ動いている。死の意識を超えてこの世界を「すべてよし」と是認する「新しい人間」というのはその定義の下限であろう。キリーロフは「神人」にも比すべき「人神」を夢想していた筈だが、明確には表現されていない。彼が自殺すれば、キリーロフ以外に「人神」が現われることになる。そのあたりもはっきりしていない。「人神」は漠然としているが故に面白いということもある。作者はそれを無意識のうちに計算していたのであろうか。

## IX

「人間が不幸なのは自分が幸福なことを知らないからだ」というキリーロフの幸福論は「すべてよし」の延長線上にある。彼の議論は「人が餓死しても、女の子が辱められてもそれでもやはりいい」と振幅がぶれて、スタヴローギンを戸惑わせるが、キリーロフの意識の中ではそこにストレスは置かれていない。トータルとしての人間の生活は「すべてよし」なのである。彼のこの楽天主義ともみえる肯定は、「自殺論」の裏返しなのであり、「人神」の觀念がその肯定を支えている。「あれ」はあれ、「これ」はこれで別々にあるようにみえながらキリーロフの想念の中では一つになっている。

キリーロフの「大石」からの脱出は、「生きても生きていなくても同じ」という精神境位に人間が達したら実現する。彼の究極の希求はそこにある。死の束縛から遁れた新しい人間存在の形式が誕生し、人類は「ゴリラから神の撲滅まで」の時代を経て、新たな歴史の時代に入る。

それは人々が「今の」生活を幸福だと心底から感じることから始まるのではないか。そこでは時間が停まり、現世が永世になる……

「君は未来の永世を信じるようになったのですか？」

「いや、未来の永世じゃない、この世の永世です。一つの瞬間がある。その瞬間に到達すると、時は忽然と停まってしまふ。それでもう永世になってしまうのです」(『悪霊』第二編第一章の五)<sup>(9)</sup>

この「永世」——時間の消滅に対して「どうも難しそうだ」とスタヴローギンは率直な感想を洩らす。「ゴリラから神の撲滅まで」の時間の長さに比べてキリーロフは「神の撲滅から……」の後半のスパンを短く考えすぎている。

る。そう簡単に人間は変われないと思うスタヴローギンの方が読者には至当におもえるが、キリーロフの想いはそこにはない——自然律が厳然とある限り、人間の側で意識をまったく変換しなければ、「大石」の下に人間存在の歴史はそのまま永遠につづくだろうというのが彼の危惧である。絶対者の欺瞞に気がついた瞬間に人間は意識を変えなければ時期を失う——それは人間の不幸だというのがキリーロフの信念であろう。そこには「時」の長さの感覚など入りこむ余地はない。

「生きてても生きなくても同じ」意識を人間が獲得すること——それは至難の技であるか？キリーロフは平凡な「生活」に没頭することによって、人間が「今の瞬間の幸福」の感覚を掴み、それを糸口にして意識の変革が可能なのではないかと考える……

その時点ではキリーロフは自分の意識の変革が片方に自死の錘を持っていることを失念している。「あれはあれ、これはこれ」と言えなければ——「生活」だけでは、死を超える意識を持つことは難しい。スタヴローギンの感想は、キリーロフの苦悩と樂觀をともによく理解している。

## X

『悪霊』は最初『父と子』小説の構想で始まり、その後形而上的小説に大きく変貌した。それは主としてスタヴローギンの出現によるが、決定稿になってからのキリーロフの扱いが変化したことによって一層深化をとげたといえよう——『悪霊』はスタヴローギン一人から、キリーロフとの双頭の小説になったのである。スタヴローギンは論理の果てまで行き、キリーロフはその「結氷点」から飛躍した。この、いわば「複相」が『悪霊』の幅である。

ドストエフスキーは二人の主人公を描くことによって、「金色の光」——イッポリート以来の問に一つの回答を試みた。スタヴローギンの『非意味の世界』に出るのも一つの道であろう——「論理」の途絶した果てにその空間

は在る。だが、「意味」にこだわらずにつづけるとすれば、それはキリーロフの「意識」の世界であらう。

人間の存在は自己意識であり、その意識によって人間は人間たることを自覚し、人間存在として存在し得る。ドストエフスキーはキリーロフの意識を絶対的意識として置いた。その意識はそれだけで在るものであり、他の何物をも反映しない。それは正しく絶対者の意識であり、キリーロフそのものが「神」だということだ。

キリーロフは「大石」に対する意識をもたない人物として設定されている。死が人間存在の形をすべて規定しているとしたら、死を超えないかぎり人間の新しい歴史の可能性はない。「最高の自由」を得なければ、人間の存在と言えないならば、いかにして「大石」から逃れ出るかが焦点になる。ドストエフスキーは「大石」に「人神」を対置させている。「人神」の荒唐無稽さが「大石」の緊迫感を揺さぶる……これはドストエフスキーの発想でもかなり秀逸な方に属する。

人間はこれまで他律の世界を生きてきた——それが「生きる」ということであり、その絶対者の枠の中で意味を見出そうとしてきた。他律と妥協し、他律のなかに相対的自律を求めようとしたのが宗教であり、哲学であった。「生かされて在る」という言い方は人間が発明した最大の欺瞞的表現であるかもしれないのだ。

イッポリートの「告白」が「調和」の問題を軸にして展開したあたりから、ドストエフスキーは「他律」「自律」のことを意識にのぼせはじめる。正面から行けば、人間が絶対の「自律」のなかに在ることは不可能である。絶対者は否定し追放しても、依然として「自然律」だけは厳然として在るし、在り続けるだろう。「自然律」があれば人間の「自律」はない。

「最高の自由」は、「死の家」から引きずりつづけてきたドストエフスキーの年来の観念である。それがキリーロフでは最も明確な形であらわれている。人間が「自律」のなかにあらうとすれば、「大石」を——「自然律」の問題をなんとかしなければならぬ。作家は「人神」を梃子にして「生きても生きていなくても同じ」という境位に人が達しられるかどうか——をキリーロフで試みた。キリーロフの自殺が傍目には、ただの惨めな無意味な死に見えたとしても、それは「そこ」に——人類の歴史の上に「何か」を置いたのだとドストエフスキーは「妄想」する。

神が人造の価値ならば、「人神」だって同じではないのか。すべては「フシヨウ ラブノー」(みな同じ。どうでもよい)である。

この言葉はスタヴローギンもよく口にする。『悪霊』の一つのキイ・ワードと言えよう。ただ両者には使い方の違いがある。スタヴローギンは結局、意味を求めない「非意味」の世界に達し、キリーロフは意味を求めるために「自律」の世界を追いついて、「生きていても生きていなくても同じ」境地に到達しようとする。「フシヨウ ラブノー」は二人の意識の始点でもあり終点でもある。彼らは別々の「フシヨウ ラブノー」をいだし、それぞれの道を歩いた。作家は両人の「へだたり」を容認し、その隔たりの中に、何かを探ろうとする。共通しているのは彼らの意識の絶対性である。二人とも自己の世界の——自己の内なる世界の意識のみを反映している。意識の対象は自分自身だけであり、そこに何物の介入も許さない。彼らは自己の存在を絶対的意識のなかでのみ感じ、認識する。

ドストエフスキーは二人の人物の独自の存在を——その絶対的意識を認めながらも、相対的意識の存在も視野に入れていた。人間の意識はつねに対象によって浸潤されている。意識の絶対性というものは当人の觀念のなかにあるだけで、本当は虚妄なのではないか。人間はやはり「他律」の中に生きる存在であり、意識も相対的なものである。その時の意識は対象の「意志」の反映である。自己の意識は絶対者の意識と重なる……ただ人間存在の方でそれを積極的に受けとめるかどうかの話なのだ。

自己が自己をみるにすぎないだけの自足的な意識だとすれば、それは単なる觀念的意識であって絶対的意識ではない。真に自己が自己を透徹して観ようとすれば、他者の眼によって自己をみるのでなければならない。他者の自覚がないかぎり、真正な自己意識ではないとしたら、意識の絶対性というものは本来困難なのかも知れない。

或いは人間の意識はその絶対性を信じているときと、他律の世界の反映を受け入れる柔軟なときとが同一の人間のなかにもあるのではなからうか——とドストエフスキーは考えているふしがある。どちらの時に人はより真実に近づくのであろうか。絶対者の自己表現として万有をみる時、その表現を映す鏡として人間の意識はある。

「緑のところが少なくなつて端のほうから枯れかけた黄色い木の葉」は十歳のキリーロフの思い出とつながる。



作者は何故この場面をかいたのであろうか。有限の存在が「木の葉」を介して無限とつながるとき、人間がそこに観るものは何なのか——ドストエフスキーは意識の絶対性と相対性のはざまで問いかけている。

## 注

- (1) ドストエフスキー三十巻本全集第十一巻へ『悪霊』創作ノート 二三四頁 「ナウカ」出版所 レニングラート 一九七四年
- (2) 同前 二六五頁
- (3) (1) と同書 三〇三頁
- (4) 同前全集 第八巻〈白痴〉 四三三頁 同前 一九七三年
- (5) 同前全集 第十巻〈悪霊〉 九三頁 同前 一九七四年
- (6) (5) と同書 九四頁
- (7) 同前
- (8) (5) と同書 四七二頁
- (9) (5) と同書 一八八頁